

Title	近世寺社参詣における御師の役割：大山御師の檀廻を通じて
Sub Title	Oshi (御師)'s role in the worship to shrines and temples in the modern ages
Author	原, 淳一郎(Hara, Jun-Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	2004
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.2/3 (2004. 12) ,p.79(225)- 104(250)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20041200-0079">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20041200-0079</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 近世寺社参詣における御師の役割

——大山御師の檀廻を通じて——

原 淳一郎

はじめに

近世の寺社参詣を支えたものは何か。一般に、莊園制の解体に起因する寺社の宣伝行為、生活水準の向上、交通制度の発達、出版文化の発展などがあげられている<sup>(1)</sup>。

だが、都市知識人層ならともかく、都市や村落における中下層民が、案内記や名所図会の類の書籍を手に取ることなど果たして可能だったのだろうか。生活水準や交通環境の向上だけで、恒常的に人を呼び寄せ、或いは村落内に広汎に広がった参詣講を形成するだけの契機となったのだろうか。各々未だ検討の余地が残されているように思われる。

かつてE・デュルケームが説いたように、宗教を存立せしめているものは教会組織・信者組織であり、信者が

存在してこそ初めて宗教が成立するのであるから、宗教的介在者と信者との相互の関わり合いを考察することは、それだけで充分意義があることである。そこで本稿では、かかる複数の要因のうち、今ひとつ近世的寺社参詣確立の重要な要因とされてきた御師の活動とその役割について論究していく。御師とは、熊野・伊勢に代表されるように、特定の寺社に属し、祈祷・宿泊・参詣の便宜をはかる者である。時代・寺社によって多少職能が異なるが、概ね寺社へ参詣者を誘発し、檀那を維持する役目を果たしていた。近世に檀那は増加したものの信仰的絆は減退し、参詣者の直接母胎は講であったとされる<sup>(3)</sup>。かかる寺社の代理人ともいえる「御師」と檀家という二つの重要な存在によって構築された師檀関係について、寺社参詣を支えたその組織的な機能について論じようとするもの

である。

歴史学では、高埜利彦氏が、辻善之助氏<sup>(4)</sup>以来の仏教史偏重を批判し、神社・神職・修験・陰陽師・民間宗教者研究の必要性を説いて口火を切り、九〇年代に入ると、「身分的周縁」論の後押しを受ける形で、多くの研究者により神主・神子・修験・民間宗教者などの生活実態が明らかにされた。これらは具体的且つ詳細な研究であるため、信仰的側面に限らず、生活文化面に至るまで実態解明は極めて進展した。さらに近年では、仏教の分野をも包括して、地域社会において寺院が果たしていた社会的機能について着目する宗教社会史という研究視角も立ち現れた<sup>(6)</sup>。この宗教社会史は、寺院に留まらず、都市における鎮守の機能分析にまで及<sup>(7)</sup>び、なかなか学会の共有財産とはなりにくかった宗教史の新たな可能性を提起したものと言つて良いだろう。

だが、かかる諸宗教研究は、そもそも身分制論にこうした周縁の人々をいかに組み込むかという課題が原点である。つまり、地域社会における宗教者の活動の実態解明を足掛かりとして、幕藩国家権力における宗教統制・編成をいかに把握するかが最終的目的であるため、先の問題に答えるような視点を有していない。また山岳信仰

史・寺社参詣史においては、一山史という形態でまとめられることが多い。その手法は、歴史学のみならず民俗学・地理学などを取り込み、多彩な分析視角により対象を考察した学際的なものである。そして、研究としてはまとまりが良いのも事実である。だが、諸要素個々については議論が停滞する弊害もあるのではないだろうか。このことが、寺社参詣史の統一的な議論を阻んできたと言つて良い。本稿の論点である宗教的介在者についても、一山史の範疇での宗教的介在者の研究は枚挙に暇がない。だがそれでは、信仰圏の解明、檀家の分布といった基礎的データを提示するのみで、近世的寺社参詣を存立させた宗教的介在者の機能的側面を議論する状況を生み出すことはできない。広い視野に立ちこの壁をいかに打ち破るかが今後の課題であろう。

本稿で検討対象とする相模大山は、関東一円のみならず陸奥から越後・甲斐・尾張まで檀家を有し、特に都市江戸の発展と共に隆盛を極めた山岳信仰である。この相模大山の勢力拡大には、御師と呼ばれる宗教的介在者による積極的な活動がその背景にあったとされる。大山御師については、既にいくつか先行研究がある。浅香幸雄氏は、通常年一回である檀廻（檀家宅を廻ること）が、

年二〜四回と複数回（多度勤め）行われている相模原台地南部の川向八ヶ村に注目し、恵まれない自然的条件と米作の不安定さから大山への帰依を深め、御師との強固なつながりをもったことを明らかにした。<sup>(8)</sup>堀一郎氏は、宗教本来のあり方から眺めると、宗教の伝播受容、即ち宗教の対社会的機能の面が最も重要であり、宗教者と信仰受容者との相互の関わり合いを問題としなければならぬ<sup>(9)</sup>としたが、この指摘を踏まえると、この浅香論文は、御師と檀家双方の背景考察を行った画期的な論文である。続いて、田中宣一氏が、大山御師の一つ村山坊の下総国における檀廻について分析し、初穂が極めて組織化された手法で集金されていたことなど、檀廻の様相を詳細に分析した。<sup>(10)</sup>斯くの如く、農村における檀廻については具体的に分かりつつあるものの、都市における檀廻についてはほとんど研究がなされていないのが現状である。

筆者は以前、江戸の檀家について分析したことがあるが、これは民衆思想史的・文化史的立場からの分析のため、文芸作品で統一的に登場する「中以下の者」という大山参詣者への共通認識の実像や、師檀関係の実態など江戸檀家の詳細については不明確な点が多数残ってしまった。<sup>(11)</sup>そこで、本稿では江戸檀家进行分析することとする。

主に檀廻について分析する過程で、江戸檀家と大山御師との師檀関係の実態、双方にとっての存在意義を考察する。また、都市社会の特質を十分に考慮に入れた上で、近世の都市における寺社参詣の成り立ちと、その背景にある宗教的介在者の役割、信仰の浸透・拡大・変遷を明らかにしていくことも目的としている。

### 一、江戸における檀廻

江戸の檀廻を論じる前に、農漁村における檀廻について触れておきたい。まず御師が檀家を廻る形態は、二通りあった。「直廻」と「置札」がそれである。読んで字の如く、「直廻」は檀家一軒一軒を訪問するものであり、「置札」はある特定の有力檀家に札を複数枚預け、手数料を渡して配札を依頼するものである。このうち、村では「置札」が圧倒的に多い。<sup>(12)</sup>「置札」の場合、初穂の集金は以下の通りである。配札を依頼した家に、村内での初穂の取り集めと指定場所への届け方をも頼む。御師は次の村へと向かい、檀廻を続けることとなるが、その間村同志で自動的に集金していき、何段階かの過程を経て、最終的に船橋の亀屋など数拠点に集約される。御師は檀廻の帰路そこへ立ち寄り、集められた初穂を回収すると

いう手筈になつてゐるわけである。<sup>(13)</sup>つまり、御師不在の集金システムが確立されていた。

ついで、本題の江戸檀廻であるが、本稿では主に大山御師のうち村山坊の史料を使用していくため、特に断りのない場合は村山坊であることを始めに断つておく。通常、村山坊では、都市江戸をどのように巡つていたのか。天保十一(一八四〇)年十月の「檀廻中手控」<sup>(14)</sup>をまとめると、以下の通りになる。

大山を出発すると、東海道に出、初日は保土ヶ谷泊で、二日目に江戸に入る。三日目は宿に逗留し、荷解きをし、日本橋周辺で必需品を購入して廻る。この際、世話人として甚左衛門町家主半兵衛店の宇之助と、糺町老町目の相模屋源治郎右側湯屋の隣林蔵居所の二人が上げられているが、この世話人二名がいかなる役割を果たしていたのかは定かではない。四日目(江戸檀廻初日)に、両掛に配り盆・帳面・雨具・小遣などを詰め、ようやく江戸市中の壇廻に出掛け、この日は日本橋周辺の壇廻となる。戻ると、初尾を調べ、翌日入用の札(半紙包、水引は二本づつ)・山椒・はしを用意するなど、次の日の準備を行う。五日目(江戸檀廻二日目)の八町堀辺り以降は、次に掲げる通りである。

六日目 深川辺 七日目 本所辺 八日目 神田湯嶋辺 九日目 下谷坂本辺 十日目 桐ヶ谷芝辺 十一日目 染井小石川辺 十二日目 四ッ谷赤坂辺 十三日目 麻布辺

十三日目で都合十日間の江戸壇廻を終えると、早速十四日目に降は葛西檀廻(亀有・小岩など)に取りかかり、二〇日目には一旦江戸へ戻つている。この時は、日本橋の世話人宅に立ち寄つたのか、余計な物は明荷に入れ、宿に預けている。

そしてまた二一日目以降は下総檀廻に出、二八日目には船橋亀屋に寄り、仕度の後、荷物は亀屋に残して、今度は小金(現松戸市付近)檀廻に向つた。三六日目には再び江戸へ戻つたものの、すぐに上総檀廻に出掛けている。ようやく四三日目に上総檀廻を終了すると、帰路船橋亀屋で昼食を取つた後、江戸へ戻つた。これで天保十一(一八四〇)年の江戸から武蔵東部(葛西領)・下総・上総に及ぶ檀廻が済んでいる。

檀廻においては、船橋の亀屋孫右衛門など特定の協力者がおり、荷物を預けていた。檀廻をはじめに当たつて、まず前年度の実績と照らし合わせる。こうして、預けていた荷物では足りない部分だけを仕入れることにな

る。江戸の場合は、日本橋の世話人宅を基点にして、一日がかりで日本橋周辺の諸店舗をまわっていた。

村山坊では、弘化四（一八四七）年の「江戸檀廻帳」<sup>(15)</sup>においても、この天保十一（一八四〇）年とほぼ同じ廻り方であるため、毎年およそ一定のコースを辿っていたものと考えられる。一見すると、農村の場合と同じくシステム化され、毎年定額の初穂が見込めそうである。ところが、檀廻帳には「行方知れず」「本年はなし」「〇年断」<sup>(16)</sup>といった記述が多数散見される。このことから、初穂料の高下や有無でさえも檀家側が決定権を握り、また檀家の無断引越等により行方がつかめないなど、師檀関係の脆さが浮き彫りになる。

かかる江戸における師檀関係の薄弱さについては、明治初年に編纂された「開導記」から窺うことができる。

「開導記」とは、明治初めに御師の全檀家を書き出させて、檀家の範囲・数を把握しようとしたものである。表一はこの「開導記」に掲載される限りの全江戸檀家を示したものである。農村では、○郡○村では○戸というように、村毎に檀家戸数を記載する形式をとるが、江戸では全く異なり、皆講単位で書き出されている。つまり個人檀家は全く書き上げられていない。これは江戸檀家に

限って明らかに不備があると言わざるをえない。江戸檀家帳の類では、「行方しれず」「跡方ナシ」との記載がある例も多く、特に個人檀家については、御師との関係が希薄で、檀家を充分に把握しきれていなかったのではないかと考えられる。

その後「開導記」の再編集に際して、明治十六（一八八三）年に各御師から持場書上が差し出された。このうち内海浦治が提出した「受持場書抜」<sup>(17)</sup>では、全地域の全檀家をずらつと書き上げられた最後に、江戸檀家が記されている。そこでは、

外二 東京御神酒講 浅草

同 繁栄講

同 御神酒講 深川

同 御神酒講 浜町

町々

と四つの講名が記されたのみで、あとは「町々」と極めて曖昧な表現で済まされている。他に、高尾家・村山家の二家の書上も残るが、高尾家の書上<sup>(18)</sup>には、江戸檀家を廻っていたことを示す史料も複数残っているにも関わらず、東京市内の檀家は記されてはいない。また村山家の書上<sup>(19)</sup>には、白金猿町、浅草猿若町、石工による三箇所の

表一、『開導記』における全江戸檀家

先導師	地名	講名	講元	世話人	戸数
二階堂若満	日本橋区蠣ヶ町	米商仲買社中			184戸
二階堂若満	日本橋区	理髮職講中			1407戸
二階堂若満	日本橋区砥河岸	車力講中			150戸
二階堂若満	日本橋区四日市花河岸	車力講中			512戸
二階堂若満	日本橋区葭町、大坂町	芸者屋講中			463戸
二階堂若満	日本橋区、京橋区、神田区	足代講中			1700戸
二階堂若満	神田区向柳原、餌鳥町	敬慎講中			117戸
二階堂若満	小柳町	鈴講中			121戸
二階堂若満	麴町区三番町	蠟燭講中			80戸
二階堂若満	赤坂区青山北町	青山講中			350戸
和田周次郎		わ組か組講中			
三村深雪	東京京橋神田	東京京橋神田永栄講中	京橋鎗屋町山田幾右エ門		
三村深雪		勢講中	本所区外手町柏木清太郎		
吉川帆澄		志んば		金沢熊次郎	29戸
吉川帆澄	日本橋十八ヶ町	神酒講		川林十次郎	122戸
吉川帆澄		丸銃講		箔屋町富岡半蔵	16戸
吉川帆澄	根津	根津廓講		渡坂清吉	100戸
吉川帆澄		錦魚講		根津藍染町春日吉五郎	19戸
吉川帆澄	牛込馬場下町	牛込馬場下町講中		八百音吉	30戸
吉川帆澄	麴町四ッ谷	麴町四や組中		佐藤次郎吉	40戸
吉川帆澄	内藤新宿上町			土屋勝次郎	48戸
相原武夫	日本橋区本材木町二丁目、三丁目				3戸
相原武夫	京橋区南伝馬町三丁目				8戸
太田菊麿	京橋区木挽町				
太田菊麿	京橋区南八丁堀				
太田菊麿	新橋区滝山町				

太田菊麿	新橋区惣十郎町				
太田菊麿	新橋区山王町				
大田菊麿	深川区清澄町				
尾崎一江	谷中	谷中御伏物講			
尾崎一江		に組講中			
尾崎一江	牛込	牛込縁日講			
尾崎一江	大門	大門通鋼鉄講			
尾崎一江	京橋	京橋釘店講			
尾崎一江	深川木場	深川木場講			
尾崎一江	四ッ谷	四ッ谷天龍寺門前講			
尾崎一江	品川	品川妙圓寺門前講			

註、大山阿夫利神社編『相模大山街道』（1987年）掲載の「開導記」より作成。

檀家が記されるのみである。村山坊は、弘化四（一八四七）年時点で、二九一名程の江戸檀家を抱えていたのであるから、<sup>(20)</sup>いくら神仏分離や廃仏毀釈により甚大な影響を蒙ったにしても、これが三箇所の檀家を持つだけまでに減らしてしまったことも不自然な現象である。

この「開導記」における明白な不備は、御師をも巻き込んだ山内における権力闘争と体制の弱体化、そして御師の檀廻の退化により、いわば檀家の信仰心が篩に掛けられる状態に陥ったことによるものである。御師にとつてみれば、江戸講として存在していれば把握できるが、個人レヴェルではどこまでが檀家であるか否か判別がつかない状況であった。結果として、「開導記」編集・再

編集の際、未だ師檀関係が強固に維持されている数講以外は把握が困難で、不完全なものとなってしまったのである。その要因として次のようなことが考えられる。江戸町方人口の約七割以上は店借層のため、<sup>(21)</sup>大多数の都市下層民は江戸の町政には参加できず、支配編成も不十分で、御師が容易に近付くことが可能な状況が作り出されていた。<sup>(22)</sup>その反面、毎年こまかに廻ってみなければ檀家として継続（初穂の有無）しているか、或いは実際そこに住んでいるかさえも分からないという不安定要素を含んでいたのである。



表二、天保2(1831)年夏山祭礼中における居住地別坊入者数

	坊入者数	全体比率
江戸	181人	21.80%
相模	78人	9.40%
武蔵西部	41人	4.90%
葛西領	113人	13.60%
上総	58人	7.00%
下総	360人	43.20%
その他	1人	0.10%
計	832人	100.00%

註、「天保二年六月 御祭礼中諸収納控帳」より作成。

五四一文) に対して、収入は金十一両三三九文(金一両三分二朱と六〇貫五六三文白米二升余)であり、三両一五〇文の黒字であった。収入のうち二〇貫六四四文が江戸の収入であり、この弘化二(一八四五)年の檀家廻りにおいておよそ三割程度である。

次に夏季祭礼中の坊入<sup>(24)</sup>における収支であるが、天保二(一八三二)年の坊入では、収入六〇両一分一朱一七七文に対して、支出は五八両二分一朱三六七文であり、差引一兩二分三朱二二五文の黒字であった。つまり、御師の経営収益の両輪とも言える檀廻と坊入による収入は、三兩余と一兩余で、いずれも薄利であったと結論づける

この江戸檀廻における収入はどの程度のものであったのかということであるが、弘化二(一八四五)年十一月の「諸手控」(村山坊<sup>(23)</sup>)によれば、江戸・下総・上総の檀廻による支出金八兩一八九文(金三兩一分と三一貫

ことができよう。同じ史料<sup>(25)</sup>をもとに、夏山祭礼中の坊入者の居住地を示すと、次の表二のようになる。まず指摘できるのは、北関東からの参詣者がいないことである。北関東への配札・檀廻を示す史料も少ないため、檀廻も数年置きに行われる程度であり、参詣もほとんどなかった可能性を示すものである。

そのため、通常は南関東への配札(檀廻)と南関東からの参詣(坊入)で収支が賅われていたといえよう。天保十一(一八四〇)年と弘化四(一八四七)年の両檀廻りは、夏山祭礼中に坊入をした檀家の実に八五・六%を廻っていることになり、江戸・葛西領・下総・上総への檀廻は夏山季の「坊入り」を考えると、極めて重要な地域であった。この大旦那場とも言える地域を廻りながらも、その黒字は僅か一兩余であったのである。

御師にとって、檀廻と坊入における収入はいずれも決して大きな黒字を期待できるものではなく、あくまでも毎年必ず廻ることによって最低限の経営維持が可能な程度であった。農漁村においては、初穂の集金体制の確立によって、毎年の収入がほぼ一定度見込める。だが、江戸においては檀家の入れ替わりも激しく、年によってか

なり変動があつたものと考えられる。それ故、全体の黒字が薄利であればあるほど、江戸における配札の重要度は増すのである。

## 二、御師側の檀家認識

江戸檀廻においては、檀家ごとの格付けが存在しており、それは土産物、札の種類などに如実に表れている。例えば、村山八太夫<sup>(26)</sup>・高尾左仲<sup>(27)</sup>の両家では、○や△の記号で区別しており、神崎半太夫家<sup>(28)</sup>はイ・セ・ム<sup>(28)</sup>の記号で区別している。ただ、これは必ずしも固定された評価ではなく、あくまでも次回の檀廻時の仕入れの目安程度のものであったと考えられる。このことは、本来○の檀家に「当亥年△」と加筆されていることから分り、おそらくは初穂額の高下によって決められていた格付けであろう。

この記号の違いがもたらす、配札や土産物の差違は、いかなるものか。村山坊と神崎家の例によると、以下の通りである。

(例) 村山坊 弘化四年(一八四七) ↓表四参照  
○○○ 奉書札 守 利久箸一〇膳(袋入) 山椒  
茶焙 別に菓子鉢 小千代口 茶台之類

○ 包上札 山椒 利久一〇(袋入) 茶焙

振出之類

○ 包上札 山椒 杉はし二(袋入) 茶焙

△ 包上札 山椒 杉はし二(袋入) 茶焙

(例) 神崎半太夫 土産物覚 安政三年(一八五六) ↓

表五参照

イ はご板 茶ほうじ はぎはし(はご板がきれた

時は、両わ茶ほうじ一〇〇文に一五本くらい)

セ くミ うちわ はきはし

ム はきはし 糸まき

村山坊の○と△では違いがなく、この理由は不明だが、とりあえず記号の違いによって札の種類や土産物の種類に差を付けていたことだけは明らかである。

これを農村部と比較してみよう。中之院の慶応四(一八六八)年の「望陀郡・周集郡御檀所継立帳<sup>(29)</sup>」によると、御師の檀廻に際して、村毎に人足一人か馬一疋を出して村継をしている。この継立帳には、村毎に名主の押印があることから、農村では、講単位や個人檀家単位ではなく、あくまでも村単位で師檀関係を結んでいることが明白である。このことは、名主家を定宿とする例が多く、「置札」の場合は銭一文を与えて、配札を依頼するなど

の関係を構築していることなどからも論証できる。

また村山坊の天保八(一八三七)年の「下総国檀家帳」<sup>(30)</sup>によると、村内における役の違いが檀家の格付けの違いに繋がっていることが分かる。次の通りに御師は区別していた。

名主 大札、絵、八寸箸(二膳)、杓子、菓  
年寄・寺院 大札、八寸箸(二膳)、菓  
村方 小札、はし・菓のどちらか一つ

単純に信仰心などの私的条件により初穂が上下し、札・土産物の種類が異なる都市の場合と違い、村落内の役や職分によって札・土産物の種類が異なっていた。<sup>(31)</sup>つまり、村役・僧侶などの身分が初穂を規定していたと言えよう。

このことを前提として、表三で都市部と農村部における配布物の違いを見てみたいが、明らかに都市型・農村型の土産配布方法が存在した。いずれも都市生活・農村生活を反映したものを選んでいたのか、江戸では団扇や茶道具(茶焙、茶台など)といった文化的な生活余剰物といえる物であり、農村部では菓や絵などである。絵は、江戸檀家には一切配っておらず、南伝馬町耆町目辺りで錦絵を仕入れているため<sup>(32)</sup>、当時の流行の絵を仕入れて農

村部に配ったと考えられる。菓については、高尾親胤家の史料によると、<sup>(33)</sup>正気散・口中菓・膏菓を自ら製造し、檀家に配布している。菓も江戸檀家には一切配布しておらず、農村部ではなかなか入手困難なものや実用品が望まれていたことが分かる。それは、八王子など養蚕が盛んな土地では虫除札が配られ、漁村では船札が配られていることによく表れており、<sup>(34)</sup>得意先の実状を見据えた御師側の努力の跡が窺われる。

単純に配る物に違いがあるだけではない。そもそも江戸と農村とでは格差があった。それは、札の種類や、札の上包や箸の袋の有無に露骨に現れている。分かりやすい例を挙げよう。江戸檀廻のうち唯二箇所だけ村を廻っている。そしてこの谷山村と桐ヶ谷村の二ヶ村でのみ農村型の土産配布が行われた。この際桐ヶ谷講中へ配ったものを、江戸講に配ったものと比べると、谷山・桐ヶ谷では、札の包がなく、土産物の並箸の袋がなかった(表三)。明らかに農村型は格下の扱いである。

また表三に示した通り、特定の土産物を配布する先があった。江戸では、毎年多額の初穂を奉納するか、講の世話人役を務める家であり、農村では、檀廻の際に定宿としている場所であった。つまり、江戸では、個人的な

表三、天保11(1840)年廻檀時の御師配布形態

	都市型 (江戸)	農村型(葛西、下総、上総、江戸の一部)
配り物	札(奉書札、糊入札)、守、上団扇、並団扇、山椒、利休箸、並はし	糊入札、半紙札、杓子、くすり、はし、絵
特定土産物	有力檀家へはし筈類 1日目(日本橋)中村・市村両芝居大夫・仕切場 2日目(八丁堀)北八丁堀金六町船大工わらがし源太郎 3日目(深川)熊井町名主熊井利三郎、深川仲町木櫛屋小松屋三治郎 5日目(神田湯嶋)神田佐久間町石屋新五郎、下谷榎町一丁目無縁坂そばや近江や善蔵 6日目(下谷坂本)浅草新取越一丁目強力稲荷別当修験良宝院 7日目(桐ヶ谷芝)品川台町搗米屋いせや新兵衛、三田ひじり坂下ふや六右衛門、三田ひじり坂下左官金五郎 8日目(染井小石川)四ッ谷仲殿町仕事師伊セヤ金八、金兵衛 10日目(麻布)麻布北日ヶ久保塗師や吉五郎、麻布十番八百屋清五郎、麻布十番長坂下仲町植木や庄助	宿への土産物【たばこ入類(38)、吸ものわん(12)、盆(53)、黒四ツ椀(2)】
講中行	2日目(八丁堀) わら川岸講中(糊入札10枚)、3日目(深川) 徳右衛門町講中(糊入札30枚、袋入はし添)、7日目(桐ヶ谷・芝) 三田講中(札△印20枚)、10日目(麻布) 八百屋講中(札△印20枚)	7日目(桐ヶ谷・芝) 谷山村(7枚上包なし、並はし7膳袋なし)、桐ヶ谷講中(30枚上包なし、並はし30膳袋なし)

註、村山家文書「天保十一年十月江戸檀廻帳」より作成。江戸の檀家個人データは、「弘化四年五月江戸檀廻帳」により比定し加入。

つながりを重視し、農村では全ての面でシステムが出来上がっているため、檀家個人よりもむしろそのシステムを支える宿を重視していたのである。これは、定宿が次の檀廻時までの土産物の保管や、初穂の取り纏めを請け負っていたことによる。

### 三、御師の檀家保有形態

都市部では師檀関係が個人的結合の上に成り立ち、江戸檀家を重視する御師によって、農村部よりも格上の扱いを受けていたものの、その反面、常に檀家が消滅する怖さを伴っていた。次に、この点をより明確にすべく、江戸における檀家の保有状況を詳細に見ていくこととする。

村山坊では、天保十一(一八四〇)年と弘化四(一八四七)年の二年分の檀廻帳を比較すると、江戸内を十の地域に分けて檀廻していたことが明らかになる。その十地域別それぞれの檀家数と評価別の檀家数を示したものが表四と表五である。この二表を比較検討し

表四、村山坊による檀家区別（天保11年）

	○○○○○	○○○○	○○○	○○	○	△	計
日本橋辺				8	28	9	45
八丁堀辺				5	15	6	26
深川辺	1		1	5	25	17	49
本所辺				1	17	4	22
神田湯嶋辺				4	15	17	36
下谷坂本辺				1	13	7	21
桐ヶ谷芝辺				3	10	14	27
染井小石川辺				1	4	20	25
四ッ谷赤坂辺					19	7	26
麻布辺					7	6	13
計	1		1	28	153	107	290

註、村山家文書「天保十一年十月江戸檀廻帳」より作成。

表五、村山坊による檀家区別（弘化4年）

	○○○○○	○○○○	○○○	○○	○	△	不明	農村型	計
檀廻帳1（日本橋辺）			1	6	26	9	2		44
檀廻帳2（八丁堀辺）				6	14	1			21
檀廻帳3（深川辺）			2	6	31	5	1		45
檀廻帳4（本所辺）		1	1	3	10	1	2		18
檀廻帳5（神田湯嶋辺）				6	23	11			40
檀廻帳6（下谷坂本辺）			1	7	17	5			30
檀廻帳7（桐ヶ谷芝辺）				2	17	4	8	5	36
檀廻帳8（染井小石川辺）				2	10	16			28
檀廻帳9（四ッ谷赤坂辺）				3	10	4			17
檀廻帳9（麻布辺）					7	3	2		12
計		1	5	41	165	59	15	5	291

註、村山家文書「弘化四年五月江戸檀廻帳」より作成。

ていくと、次の四点が指摘できる。

a、日本橋・八丁堀は評価も檀家数も安定しているものの、若干減少。

b、深川・本所・神田・湯嶋では、檀家数は若干減少しているが、評価に上昇傾向が見られる。

c、下谷・坂本・桐ヶ谷・芝・染井・小石川では、檀家数も評価も上昇傾向が見られる。

d、四ッ谷・赤坂は、若干上昇傾向が見られるものの、全体としては檀家数を減らしている。

この四点それぞれについて検討を加えてみると、aの日本橋・京橋・八丁堀は家持・地主・家主（家守）階層が極めて多い土地柄、元来多くの初穂を見込んで、御師が江戸進出の際に基盤としたためか、早い時期から檀家を獲得していた地域と言え、他地域より檀家

表六、安政3(1856)年5月神崎半太夫の江戸檀家保有状況

	イ	セ	ム	不明	計
日本橋より京橋数寄やかし八代直川岸迄	68	9	5	3	85
木挽町より芝辺高輪品川辺	37	8	1	1	47
桜田久保町より西久保赤坂氷川麻布古川辺迄	33	11	0	4	48
麴町より赤坂鮫ヶ橋青山内藤新宿四ッ谷番町迄	26	9	2	3	40
八丁堀より鉄砲洲霊岸嶋新川茅場町小田原町宝町迄	30	6	0	4	40
深川本所より両国馬喰町小伝馬銀町本町辺迄	35	6	0	5	46
神田豊嶋町より外神田下谷坂本池之端明神下湯嶋迄	40	6	1	1	48
筋違外湯嶋本郷駒込祢津迄	23	2	5	2	32
小網町より人形町通久松町油町小伝馬鉄砲町白銀町辺迄	59	10	0	6	75
計	351	67	14	29	461

註、神崎家文書「安政三年五月江戸檀家帳」より作成。

近世寺社参詣における御師の役割

数が多い。この点  
は、表六で示した  
通り、神崎半太夫  
家でも、同じく日  
本橋・京橋・内神  
田周辺に、最上位  
のイに分類される  
有力檀家が多く、  
どの御師も当然と  
言えば当然だが、  
こうした江戸の中  
心部を重点地域と  
していたと考えら  
れる。ただし、十  
九世紀には新規檀  
家も頭打ち状態で  
あった。

檀家が固定(II減少)しつつあるが、若干御師との関係  
が深化した。cの江戸北部・南部地域では、御師が東海  
道を往復利用し、日本橋を拠点としていることに起因し  
てか、特に日本橋を基点に南北に檀家を増やしており、  
一八四〇年前後、新たな信者獲得を最も望める地域であ  
った。dの四ッ谷・赤坂など江戸西部は、未開拓・希薄  
な檀家が多く、檀家の新規獲得・維持に苦戦している。  
この点は、表六の神崎半太夫家でも同様で、赤坂・青  
山・内藤新宿・四ッ谷・鮫ヶ橋地域は少ない。  
一八四〇年前後において、日本橋・京橋・神田とそれ  
に付随する本所・深川地域では、檀家数は固定し、師檀  
関係も深まりつつあるものの新規獲得檀家がないたため必  
然的に檀家が減少している。それでもこの地域が核であ  
ることは疑いないが、この時期はむしろそこから日光  
道・東海道沿いに南北に檀家を獲得していた時期であり、  
このことは文化主体地域の移動と密接に絡んでいるもの  
と考えられる。つまり、嘉永文化は、庶民文芸の分野で  
は独創的且つ芸術的な側面は衰退したが、都市近郊農村  
との連携の中で生まれた菊細工や朝顔など園芸植物流行  
という一種の社会現象を巻き起こした。江戸の南北地域  
は、その担い手となった地域なのである。例えば、cの

表七、弘化4(1848)年「江戸檀家帳」に見る村山坊江戸檀家の職業

商人	飲食	蕎麦屋(3)、寿司屋(3)、茶漬屋、奈良茶屋、水茶屋、飯屋、居酒屋、茶酒店、茶屋
	食料	八百屋(9)、米屋(7)、煙草屋(4)、魚屋(3)、干物屋、鯉節屋、油揚物屋、糠屋、菜種屋
	服飾	呉服屋(4)、古着屋(3)、糸屋(2)、毛氈屋
	日用・娯楽	槓問屋(4)、薬種屋(4)、槓屋(2)、荒物屋(2)、小間物屋、絵双紙屋、釣屋
	住居・建築	材木屋(2)
	その他	質屋(4)、宿屋(2)、炭屋、草屋、馬持、奉公人宿屋、灰屋、船宿
職人	食料	酒屋(7)、菓子屋(5)、糍屋(5)、豆腐屋(5)、搗米屋(4)、油屋(4)、餅屋(3)、粉屋、麩屋
	服飾	足袋屋(3)、草履屋(2)、木櫛屋(2)、仕建屋(2)、手拭屋、下駄緒屋
	日用・娯楽	葛籠屋(3)、紙屋(2)、道具屋(2)、人形屋(2)、眼鏡屋、多葉古入屋、煙管屋、帳屋、金物屋、筆道具屋、提灯屋
	住居・建築	大工(7)、桶屋(4)、畳屋(4)、屋根屋(4)、左官(3)、表具屋・経師(3)、建具屋(2)、瓦屋
	その他	植木屋(10)、石屋(5)、仕事師(3)、鍛冶屋(3)、乗物屋(3)、塗師屋(2)、洗張屋、煙筒屋、刀屋、床屋、仏絵師、入歯師
単純労働者		車屋(15)、駕籠屋
武家	大名家家臣	日向延岡藩内藤家家臣(2)、安濃津藩藤堂家家臣、伊予大洲藩加藤家家臣
	幕府家臣	役人衆(3)、旗本戸川因幡守家臣、御家人、自身番所、別段古銅吹所(銅座)与力
その他		百姓(7)、町名主(4)、家主(3)、修験(2)、仕切場(2)、役者(2)、大屋、手習師匠

註、村山家文書「弘化四年五月江戸檀廻帳」より作成。

うち染井の檀家には植木屋が多く、ちょうど弘化から嘉永期に進展した嘉永文化の動きと合致するものである。<sup>36)</sup>天保期以降勢いを増し、文化主体ともなりつつあった江戸北部・南部地域が大山御師の新規獲得場となっていたのである。

次にこの江戸檀家の職業であるが、弘化四(一八四七)年「江戸檀廻帳」<sup>37)</sup>から村山坊のほぼ全員の江戸檀家の職業が分かるので、表七に示した。ここでは江戸檀家として載る二九一名のうち職業のはっきりする二四九名の職種を大まかに分類した。周知の通り、商人と職人の区分は極めて困難な作業であるため、多少の移動はあるだろうが、ここで分類したものに随うと、商人八〇(三一・七五%)、職人一二二(四八・四一%)、単純労働者一六(六・三五%)、武家一二(四・七六%)、その他二二(八・七三%)となる。町人が大方だが、その中でも職人が全体の約半数を占めており、商人も問屋・仲買というよりも小売り

と思われる小商人が多く、単純労働者も含めると、七割近い檀家が都市中・下層民である。この結果は、風俗としての大山詣を担っていると認識されていた「中以下の者」という表現と一致<sup>38</sup>している。文芸作品の作者は儒者、俳人、町名主、武士といった人々であるため、これら都市上層民は、大山詣の際の両国橋東詰での水垢離等の習俗を、中・下層社会で育まれた別個の文化社会として認識・把握していたことを表している<sup>39</sup>。

表八は、表五の数値をそれぞれの檀家の職業に置き換えて示したものである。この表八によれば、深川の熊井利左衛門等数名の町名主や歌舞伎仕切場、幕府別段古銅吹所技師など僅かな職種を除き、○○・○・△など初穂の高下と、武士・大商人・中小商人・零細商人・職人などの職業的背景や経済的規模との間にはほとんど因果関係を見出すことができない。つまり、大商人であつても必ずしも大きな収益を見込めるわけではないということである。

ここまで個人檀家の話を展開したが、次に江戸講について述べておこう。弘化四（一八四七）年の江戸檀廻において江戸講と接触した全記録を表九に示した。これによると、八つの講との接触があつた。配札形式は、全て

「直廻」である個人檀家とは違い、全て「置札」の形態をとっている。また農村の場合とは違い、何村にも跨る大規模且つ組織的な集金経路などはなく、各講毎に取りまとめた初穂については、檀廻時の手渡しとするか夏山祭礼中の手渡しとするか、全て御師と講世話人との話し合いで決定された。

個人檀家を丹念に巡るのに対して、江戸講を世話人への「置札」で済ませていたのは、余り発展性のない江戸講よりも、さらなる檀家数の増加を望める「直廻」を重視していた証拠である。出入・移転などが多い都市社会の構造上、農村檀廻のような地縁的講に固執する方法では先細りで、「直廻」でしか檀家拡大を望めない。より苦労が伴う「直廻」をしてでも江戸檀廻を続ける意義は、収支を黒字に転換するポイントとなる地域であるからである。

ただし表一の「開導記」ではっきり分かる通り、廃仏毀釈という宗教史上の一大変革期を経て、明治期には、職縁的結合講（結果的に地縁的結合となる場合もあり）或いは、近世初期から続く門前町という地縁的結合という小共同体社会を通じてのみ檀家が残ることとなった。御師の思惑とは逆に、これらの講が近代以降現代に至る



表八、弘化4(1848)年村山坊の江戸檀家の地域別・格付別職種

	〇〇〇	〇〇	〇	△	格付不明	不明
檀家帳1 (日本橋辺)	町名主	提灯屋、手拭屋、木櫛屋、油屋、呉服屋、乗物屋	糸屋、眼鏡屋、酒屋、魚屋、搗米屋(2)、石屋、油屋、茶漬屋、洗張屋、紙屋、人形屋(2)、帳屋、与力、そばや、絵双紙屋、足袋屋、豆腐屋、烟筒屋	駕籠屋、草履屋、楨屋、下駄緒屋、干物屋、宿屋、桶屋、搗屋、寿司屋	宿屋	7
檀家帳2 (八丁堀辺)		糸みせ、大工、役人衆、石屋	役人衆(2)、車屋(2)、乗物屋、瓦屋、魚屋、畳屋、米屋、自身番所、煙草屋	家主	なし	5
檀家帳3 (深川辺)	町名主	木櫛屋、大工、菓子屋、葛籠屋、呉服屋、寿司屋	楨問屋(3)、米屋(3)酒屋(2)、仕事師頭(2)、家主(2)、楨問屋・米屋、水茶屋、町名主、桶屋、荒物屋、飯屋・船宿、豆腐屋、塗屋、魚屋、菜種屋、鯉節屋、屋根屋、材木屋、炭屋、煙草入屋、鍛冶屋、足袋屋、古着屋	酒屋、大工、餅屋、左官、油屋	蕎麦屋	2
檀家帳4 (本所辺)	別段古銅吹所(銅座)	刀屋、紙屋、菓子屋	表具屋、表具屋・経師、薬種屋、煙草屋、屋根屋、大工、畳屋、豆腐屋、床屋	煙草屋	葛籠屋	3
檀家帳5 (神田湯嶋辺)		大名家家臣(2)、葛籠屋、蕎麦屋、酒屋・油屋、奈良茶屋	糺屋(3)、車屋(2)、毛氈屋、大家、青物屋、石屋、栗餅屋、屋根屋、草屋、畳屋、御家人、建具屋、薬種屋、仕建屋、質屋、植木屋、修験、寿司屋	米屋、大工、小間物屋、仏絵師、糺屋、入歯師、手習師匠、酒屋、仕建屋、豆腐屋、石屋	なし	2
檀家帳6 (下谷坂本辺)	仕切場	役者(2)、金物屋、八百屋、仕切場	呉服屋(2)、古着屋、薬種屋、居酒屋、畳屋、修験、車屋、粉屋、酒茶屋	百姓(2)、屋根屋、町名主、道具屋	なし	9
檀家帳7 (桐ヶ谷芝辺)		左官、搗米屋	車屋(2)、道具屋、乗物屋、足袋屋、八百屋、煙管屋、筆道具屋、菓子屋、油揚物屋、質屋、麩屋、水菓子屋、煙草屋・荒物屋、茶屋、酒屋	八百屋、釣屋、鍛冶屋、米屋	百姓(5)、灰屋、大工	7
檀家帳8 (染井小石川)		建具屋、薬屋	車屋(5)、糺屋、大工、石屋、桶屋、質屋	植木屋(8)、八百屋、豆腐屋、古着屋、旗本家臣	なし	4

檀家帳9 (四ッ谷赤坂 辺)		車屋、経師	車屋(2)、仕事師、草履 屋、左官、大名家家臣、 糠屋、桶屋、餅屋、奉公 人宿屋	鍛冶屋、大 名家家臣	なし	3
檀家帳10 (麻布辺)			八百屋(3)、材木屋、質 屋、植木屋、塗師屋	馬持、菓子 屋、榎屋	八百屋 (2)	なし

註、村山家文書「弘化四年五月江戸壇廻帳」より作成。

表九、弘化4(1847)年檀廻帳における江戸講への配札

	講名	所在(世話人)	世話人名 (配札引受人)	初尾	渡札数	土産物	渡し方
1	わらがし講中	北八町堀金六丁	船大工源太郎 (非檀家)	金2朱	10	箸袋入	数日内持 参
2	不明	本所林町5丁目	播磨屋五郎兵衛 (米屋)				
3	徳右衛門町講 中(人形おもち ゃ店講か)	本所林町5丁目	政五郎(仕事師)		30	八寸はし袋 入	祭礼中持 参
4	三田講中	三田ひじり坂下	左官金五郎・ 麩屋六右衛門		17		金五郎よ り受取
5	桐ヶ谷村大山講	桐ヶ谷村	年番		30	八寸はし1 膳ずつ、菓	祭礼持参
6	不明	染井七軒町	伊三郎他4名				
7	不明	四ッ谷仲殿町	伊勢屋金八 (仕事師)	金2朱	16	〇〇の通り	
8	麻布十番長坂 下八百や講中	麻布南日ヶ久保	八百屋清次郎 他4名	金2朱	20	杉はし袋入、 山升斗	清次郎よ り受取

註、村山家文書「弘化四年五月江戸壇廻帳」より作成。

まで、徐々に姿を消しつつも、大山信仰を支えていくという皮肉な結果を生んだ。近世的師檀関係上に成り立つ個人檀家は、ほぼ把握が困難か或いは消滅してしまつたものと考えられる。

#### 四、檀家側の御師認識

ここまで大山御師側の史料から見てきたので、最後に廻檀される側の史料から師檀関係を考察していきたいが、御府内での調査が困難なため、やむを得ず江戸近郊農村の事例で代替することとする。無論本稿では都市と農村という形での比較も行っているため、必ずしも適当ではないという批判もあるが、一地域にどれだけの御師が廻村<sup>(40)</sup>してきているかという一定の指標になろう。

(例一)は世田ヶ谷村大場家である。大場家は彦根藩世田谷領の代官であり、世田ヶ谷村名主を兼帯している家である。寛政十一(一七九九)年から文政九(一

表十、世田谷村大場家の場合 寛政11～文政9年（11年間）

	廻村数	初穂金	備考
伊勢（龍太夫、手代 中村四郎兵衛・仲）	12	500文→金2朱	安産祈願1回（金1分）
		手代へ200文	疱瘡 1回（100文）
津嶋	5	100文	
多賀	2	100文	寿命守 2個（124文×2）
富士（菊田式部）	3	100文	
榛名	2	48文	
愛宕	2	100文	
秋葉	1	100文	
江ノ島	1	100文	
高野山宝塔院	1	300文	疱瘡 1回（48文）
大山（佐藤図書）			参詣時の御礼（200文）

註、「金銀出入帳」（寛政十二年、享和二・三年・文化三・六・八・十・十一・十四・十五年、文政二・九年、天保三・四・五年）「慶応元年金銀入方控帳」「明治十九年諸払物代金請取控」「明治三十七日用」『世田谷区史料叢書』

表十一、奥沢村原家の場合 寛保2～文政5年（50年間）

	廻村数	初穂金	勸化	備考
江ノ島（五郎兵衛・ 民次郎）	55	100文・小麦1 升～2升	下ノ宮開帳ニ付勸化 2回 （金1分）	五郎兵衛へ貸1回 （200文） 五郎兵衛類焼ニ付 村中勸化金 1回 （1分）
大山（佐藤大学）	36	12・16文（10文 ～32文の時も あり）又は大麦 1升	勸化 2回（200文、24文）	
伊勢（龍太夫、手代 松岡喜介・吉右衛門）	36	100文→116文	神楽堂奉加 1回（12文）	
		手代へ12文	遷宮ニ付勸化 1回（100文） 勸化 2回（50文、48文）	
鹿島（立原作太夫）	24	32文		天明4年以降消滅
富士	17	12文（24文・32 文・50文もあ り）	勸化 1回（500文） 祈禱布施 1回（300文）	
伊勢（彦八太夫）	6	32文→50文→ 100文		安永3年以降登場
戸隠	3	12文・8文・ 16文		
三河東禅寺			勸化 1回大麦1袋（19匁 8分）	
相模寿明寺			勸化 1回（18文）	
筑波山（大御堂）			勸化 1回（6文）	

註、元文元年「万覚書帳」、宝暦三年・十一年「金銀出入覚帳」、安永元年・天明六年「万覚帳」、文化三年「金銀出入覚帳」『世田谷区史料叢書』

八二六)年まで十一年間の御師や勸進僧など様々な宗教的介在者の来訪が掴めるため、それを表一〇に示した。

この表一〇によると、伊勢御師が毎年必ず来村し、これに対して五〇〇文の初穂を納めている。その他は、高野山の塔頭には三〇〇文と格別の扱いをしているものの、基本的に一〇〇文と決めていたようである。従って、伊勢御師との結び付きが格段に強いことが分かる。安産祈願や疱瘡除祈願を依頼しているのが良い例であろう。

(例二)は奥沢村名主の原家であるが、この家では寛保二(一七四二)年から文政五(一八二二)年まで実に五十年間の御師の来訪が分かり、表一一に示した。この村では、江ノ島御師が毎年来村してきており、安定した師檀関係を築いているようだが、大山や伊勢なども大分入り込んできている。鹿島も当初は江ノ島と同等な頻度で訪れていたが、江ノ島との争いに負けたのか、天明四(一七八四)年以降は全く姿をみせなくなっている。また伊勢御師についても、従来の龍太夫<sup>(41)</sup>に加えて、安永三(二七七四)年以降上野彦八太夫<sup>(42)</sup>も加入し、極めて激しい競争が行われていたことが分かる。しかしながら、種の御師の動勢いかに関わらず、江ノ島御師の初穂は一〇〇文と安定している。別格扱いの伊勢御師を除けば、

最も初穂額が多く、江ノ島御師が奥沢村と最も安定且つ密接な関係を築いていたと言える。

斯くの如く村には御師の格付けが存在した。村落にとつては御師の存在はおよそ次の通り三種に認識されていた。

①主御師(毎年定期的に廻村し、最も強い師檀関係を結ぶ御師)

②脇御師(数年おきなど不定期に廻村する御師)

③別格御師(伊勢御師、高野山塔頭)

大山御師と各檀家を有する村々とは、毎年決められた形式で檀廻と初穂進上が行われ、確固たる師檀関係が構築されているように見える。ところが、現実には数多くの御師が廻村してきており、多数の信仰に出会う機会があった。ただその中でも、毎年必ず廻村してくる御師は自然淘汰されて一人に定まっていいたのであり、その御師側の努力によって師檀関係が維持されていた面が強い。

もう一例見ておこう。(例三)の武蔵国橋樹郡長尾村の百姓代を務める鈴木家の当主藤助の日記<sup>(43)</sup>によると、毎年暮に御嶽御師が鈴木家を訪問している。また慶応二(一八六六)年には二月十四日から十八日にかけて、御嶽太々講による御嶽山参詣<sup>(44)</sup>を行っており、この日記上に

見える唯一の恒常的な参詣講である。

鈴木藤助の日記によれば、長尾村では御嶽御師のみが廻村してくるかのようである。だが、やはり実際はそうではなかった。天保九(一八三八)年の「村年中記帳(長尾村山根家年中行事書上)<sup>(45)</sup>」によれば、同村内の山根喜十郎家では、文政七(一八二四)年と天保七(一八三六)年に廻村してきた御師に納めた初穂額が記されている。文政七(一八二四)年では、

鹿嶋様御師 御初尾 一二銅

御嶽山御師 御初尾 五合余 御狗拝借料・冬廻

り引替 米一升

夏廻り小麦一升

天保七(一八三六)年には、

大山御師・富士山御師・江之嶋御師・喜教院

夏廻り小麦

冬廻り米

榛名山御師 冬廻り米

とあり、長尾村内には、御嶽御師のみならず鹿嶋御師や大山御師・富士御師、江ノ島御師、榛名山御師など複数  
の御師が廻村してきており、御嶽御師はこの競合を勝ち抜いたのである。

つまり、村落共同体内部の人間からすれば、多数の御師が廻村し、また御師に限らず近隣の寺院からの接触も<sup>(46)</sup>あり、<sup>(47)</sup>選択肢は豊富であった。その中で、特に強固な師檀関係を取り結ぶ御師は一人と決まっていき、ほぼ毎年定期的に廻村し、檀廻方法が組織化された。村山坊の下総国檀廻でも分かる通り、たとい村全体が檀家でなくても、名主を初めとする村役人が窓口となり、御師を受け入れていた。江戸については分析できないが、未知の可能性を秘めていたこともあり、多額の初穂を目当てに、より多数の宗教者により積極的な檀廻が行われていたと推測される。初穂金は基本的な金額が決まっているが、都市性が強まれば強まるほど買い手市場で、あくまでも檀家優位・檀家主導であった。都市個人檀家の御師選択の過程は、共同体による制約がないため、即物的であっても、より檀家個人の信仰心を素直に反映したものであつたと考えられる。

おわりに

江戸檀廻は日本橋の世話人宅を基点として、毎年ほぼ決まった行程で行われていたものの、檀家の無断引越や初穂の拒否等の理由により、収入は安定せず、檀家優位

の状況であった。にもかかわらず、御師の収入が全体としては薄利であったため、檀家のさらなる増加も望める江戸は、御師の経営戦略上重要な地域であった。

御師側は、檀廻の際、大きく分けて都市型と農村型の二種類での配札を行っていた。それぞれの札や土産物の種類の差で明らかな通り、より江戸檀家を阿り、中でも個人檀家を重視していた。御師は初穂の高下という単純明快な論理によって檀家の格付けを行っていたが、日本橋・京橋・神田を重点的に廻る御師の目論見は見事に外れていた。町人役負担に基づく上層町人（狭義）であるか否か、或いは経営規模の大小などの条件と初穂額との間には何ら因果関係を見出すことができない。またあくまでも村山坊を例にすれば、問屋のような大商人は少なく小売商人や職人・単純労働者が大勢を占め、こうした都市中・下層民による文化的行動として大山詣は成り立っていた。

江戸講は、有力御師である村山坊でも、僅か八講と少なく、配札形式も「置札」であり、あまり重要視していただとは言い難い。その理由は、講として固定すると、農村と同様毎年一定した収入しか得られない上に、先細りが予想されるためである。つまり講という信仰形態は、

御師が江戸檀家に期待したものではなかったのである。ところが、神仏分離という大きな変革期を通過した結果、個人檀家は大方消滅し、その職縁的結合、門前町地縁的結合講による講のみが檀家として残存するという皮肉な結果を生んだ。

一方檀家側にとって、御師の存在は複数廻村してくる御師の一人に過ぎないが、ただその中でも次第に淘汰されて強固な師檀関係を結ぶ御師が決まっていた。特に村の場合は、村役人を先頭に村単位で師檀関係を結んでいたためこのような歴史的展開を見せたものと考えられる。都市の場合は、個人性が強く、より多数の御師が廻町しようとも、特定の御師と強固な師檀関係を結んだとは考えにくく、檀家主導ながら辛うじて師檀関係が保たれていた。

寺社参詣の形成には、檀家側の自発的信仰心が必要不可欠である。またその信仰の維持には、地縁的・職縁的結合による共同的制約が欠かせないことも事実である。これはV・ターナーの言う実在的コミュニティから規範的コミュニティスへの移行過程であり、そこには自発性と義務性が混在する<sup>(48)</sup>。だが本論で考証してきたように、特に都市においては、やはり最大条件として、御師がこま

めに檀家を廻ったことを挙げなければならない。毎年個人宅を訪問して、檀家としての継続の有無を確かめなければならぬ。これを怠れば、他の御師などに奪われ、或いは引越等で行衛が分からず檀家を失うというわけである。農村でさえ、檀廻システムを毎年きちんとなさなければ他御師の参入を許すという状況であった。寺社参詣、そしてより広く言えば宗教の近世的展開を成り立たせていた一つの要因は、御師をはじめとする宗教的介在者による積極的な檀廻であったと言っても過言ではない。

註

(1) 本文で挙げた諸要因は、諸概説書・辞書などで長年に渡り述べられてきたものであるが、その一つ一つの歴史的現象が寺社参詣の発達にいかなる影響を及ぼしたかを、具体的に実証したものはない。出版文化については、近年「観光地域史」を標榜された青柳周一氏が、地域社会からの情報発信(地誌・絵図作成)という観点から旅行文化生成に迫っている(「近世後期の絵図・地誌作成と「旅行文化」―近江の旅行史関係史料から―」『民衆史研究』六七、二〇〇四年)。この論考に見られるように、九〇年代以降歴史学において盛んとなっている由緒論、地誌論、史蹟論などの動向とも、今後密接に関わっ

てくるものと予想される。

(2) E. Durkheim: *Les Formes élémentaires de la Vie religieuse*, 1912; 古野清人訳『宗教生活の原初形態』上、岩波書店、一九四一年、八〇〜五頁。

(3) 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』、塙書房、一九六四年、七一九〜七二〇頁。

(4) 辻善之助『日本仏教史』近世篇二、岩波書店、一九五二〜五五年。この仏教墮落論の風潮は、例えばロバート・N・ベラーの著述にも(Tokugawa Religion-The Values of Pre-Industrial Japan, 1957; 池田昭訳『徳川時代の宗教』、岩波書店、一九九六年、一一三〜四頁)、はっきりとその影響が見られる。

(5) 高植利彦「幕藩制国家と本末体制」『歴史学研究』別冊、一九七九年。またこれより早く、同じ仏教史の中においても批判があった。五来重氏は、柳田国男に触発される形で高野聖研究に取り掛かり、それまでの教祖や高僧などを取り扱う教団史中心の状況に警鐘を鳴らし、庶民信仰を担った無名の聖の仏教の歴史こそ真の日本仏教史だとする主張をして(五来重『高野聖』、角川書店、一九六五年)、修験道だけでなく、その後の遊行勧進僧研究の流れを作った。

(6) 澤博勝「宗教から地域社会を読み得るか―分野史から全体史へ」『歴史評論』六二九、二〇〇二年。ただし、宗教社会史的な視点は、宗教民俗の世界にもあったものである。代表的な例を挙げるならば、桜井徳太郎「村落における仏教の機能」(和歌森太郎編『淡路島の民俗』、

吉川弘文館、一九六四年)や同「村落寺院の信仰的機能—仏教と民間信仰—」(『民間信仰』、塙書房、一九六六年)など。これらの論稿は、日本の神仏習合的現象の実態的内容を究めるため、外来宗教としての仏教が地域社会に導入されることによって、在来の信仰習俗(神道も含む)がこれをどのように受けとめ、相互に影響を与えたかという点について歴史・民俗学的手法で迫ったものである。そこでは信仰が主題になってはいるが、社会的関係への言及も見られる。

(7) 吉田正高「江戸・東京における町内鎮守管理者としての修験と地域住民—就任・相続・退身の実態を中心に—」『関東近世史研究』五四、二〇〇三年。

(8) 浅香幸雄「大山信仰登山集落形成の基盤」(『地理学研究報告』六、一九六七年)(のち圭室文雄編『大山信仰』民衆宗教史叢書二二、雄山閣、一九九二年に所収)。

(9) 堀一郎『民間信仰』、岩波書店、一九五一年、二二三頁。

(10) 田中宣一「相州大山講の御師と檀家—江戸末期の檀廻と夏山登拝をめぐって—」(『日本常民文化紀要』八一、一九八二年)(のち前掲『大山信仰』所収)。

(11) 拙稿「江戸庶民の社寺参詣—相模国大山参詣を中心として—」『地方史研究』二八〇、一九九九年。

(12) 「寛政五年 武州足立郡檀那帳」(『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年)によると、千住宿より始まるこの檀廻では、史料上に「直廻」「置札」と明記される場合のみ計算してみると、「置札」が三三三(六六%)で、「直

廻」が十七(三四%)で、やはり農村部では「置札」が多い結果となる。ただし「直廻」となっているものの中には、鴻巣宿と岩淵宿などが含まれており、これらを除くと農村部での「置札」の割合はより高い数字になる。本稿では、都市Ⅱ江戸と農村の対比により、論旨を展開させているが、鴻巣宿・岩淵宿といった宿場町も統一して「直廻」を行っている点から見て、都市と認識され、都市型の檀廻が行われている可能性が指摘できる。この宿場町を含む農村部において、「置札」と「直廻」を分ける決定的な要因について、在郷町的性格の有無も含めて、後論を期したい。

(13) 田中宣一「相州大山講の御師と檀家—江戸末期の檀廻と夏山登拝をめぐって—」(『日本常民文化紀要』八一、一九八二年)(のち前掲『大山信仰』所収)の図Bを参照。

(14) 「天保十一年十月 檀廻中手控」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

(15) 「弘化四年十一月 江戸檀廻帳」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

(16) 右に同じ。この檀廻帳の檀家名のすぐ上にこのような記載が多数散見される。

(17) 「受持場書抜」『伊勢原市史』資料編続大山、一九九四年。

(18) 「教会受持場明細記」『伊勢原市史』資料編続大山、一九九四年。

(19) 「開導記再編輯ニ付持場書出ノ写シ」『伊勢原市史』



資料編続大山、一九九四年。

- (20) 「弘化四年十一月 江戸檀廻帳」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

- (21) 松本四郎「幕末・維新时期における都市の構造」『三井文庫論叢』四、一九七〇年、一一七頁第一表。

- (22) 西垣晴次「大山とその信仰」(『郷土神奈川』一三、神奈川県立文化資料館、一九八三年)(のち前掲『大山信仰』所収)、一五頁。

- (23) 「弘化二年十一月 諸手控」『伊勢原市史』資料編続大山、一九九四年。

- (24) 「天保二年六月 御祭礼中諸収納控帳」『伊勢原市史』資料編続大山、一九九四年。坊入りの際、檀家が支払うものは、①宿泊代(一人三〇〇文)②宗教的奉納金(護摩料・初穂)③下男・下女への心付の三種である。

- (25) 右に同じ。

- (26) 「弘化四年 江戸檀廻帳」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

- (27) 「天保十五年 東都檀家軒別手控」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

- (28) 「安政三年 江戸旦家連銘帳」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

- (29) 「慶応四年 望陀郡并周集郡御檀所継立帳」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

- (30) 「天保八年 下総国檀家帳」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

- (31) 「文政七年 大山様去未御初穂取集帳」(『伊勢原市

史』資料編続大山、一九九四年)によれば、勿論村落内においても、確かに村民ごとに多少の初穂の高下はあったが、基本的には米五合か十六文或いは二十四文という一定の規定があつたことが窺われ、本人の自由意志が反映されていたとは言えない。

- (32) 「天保十一年 檀廻中手控」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。この史料によれば、江戸檀廻前の日本橋周辺における一日掛かりの仕入れにおいて、買い入れている。また「天保八年 歳中壇札并仕入物扣帳」(『伊勢原市史』資料編続大山)によれば、「百枚二付五百五十文位」とあるので、一枚五文半程度の錦絵を購入していたと考えられる。

- (33) 「天保十三年 檀廻仕入諸事取計控」『伊勢原市史』資料編続大山、一九九四年。

- (34) 「天保十五年 諸札仕入控」『伊勢原市史』資料編続大山、一九九四年。

- (35) 西山松之助「嘉永文化試論」『日本常民文化紀要』第七輯、一九八一年。

- (36) 平野恵「十九世紀江戸・東京の植木屋の多様化―近郊農村型から都市型へ―」(『地方史研究協議会編』江戸・東京近郊の史的空間』、雄山閣、二〇〇三年)は、江戸北郊農村において、菊細工を出品した植木屋が、高度な知識を背景に、農間余業に過ぎなかった園芸を、商売として成り立つまでに高めた事例を追った論稿である。文化年間に鶯鴨から始まり、弘化年間以降は、本稿で取り扱っている染井の他千駄木・根津辺も加わり、江戸北

部を核として菊細工（菊人形）文化が花開いていったのであり、この菊細工の事例からも、江戸文化の主体が明らかに外縁部に移ったことを示している。

(37) 「弘化四年 江戸檀廻帳」『伊勢原市史』資料編大山、一九九二年。

(38) 拙稿「江戸庶民の社寺参詣―相模国大山参詣を中心として―」『地方史研究』二八〇、一九九九年、六一―六二頁。

(39) この点については、滝口正哉氏が「江戸庶民信仰の娯楽化―千社札をめぐる―」〔関東近世史研究〕五四、二〇〇三年）の中で、千社札が中下層の職人層に受容される過程を分析することで、江戸上層町人とは別次元の文化社会が存在したことを指摘しており、拙稿「近世後期江戸近郊名所下北沢淡島明神社にみる文人と庶民信仰―病氣治癒の現世利益」（前掲『関東近世史研究』五四）共々、これまで西山松之助氏の「行動文化」論に全面的に依拠し、一元的に論じがちであった江戸町人の信仰・文化生活論に疑問を投げかけたものである。

(40) ここでは、「御師」という言葉を安易に利用したが、他にも信仰拡大の責務を負い、廻檀を行い、社を経済的に支えた宗教者としては、高野聖や熊野行者などが存在し、「本願」や「願人」など名称も実に多種多様で、時代とともに概念も大分移り変わっている。また次の表に登場する「多賀御師」も、実際には「坊人」と呼ばれる下層の勧進僧であり、ここでは「御師」を広義に捉えていることをあらかじめ断っておく。さらにこうした寺

社と庶民との間を取り持つ役割を担った人々の対社会的機能面から全てを包括して「宗教的介在者」という言葉を使用した。

(41) 「旧師職總人名其他取調帳」〔皇學館大学史料編纂所資料叢書第三輯 神宮御師資料―外宮篇二〕、一九八四年）によれば、度会郡山田大世古町在住である。

(42) 「旧師職總人名其他取調帳」〔皇學館大学史料編纂所資料叢書第一輯 神宮御師資料―内宮篇〕、一九八一年）によれば、平師職で中館町在住で、中川采女家来である。

(43) 白石通子・小林博子編『鈴木藤助日記』一、二〇〇一年。

(44) 白石通子・小林博子編『鈴木藤助日記』二、二〇〇三年、一八〇―一八一頁。

(45) 『川崎市史』資料編二近世、一九八九年、二二七―二三三頁。

(46) 『鈴木藤助日記』によれば、鈴木家には、時折、青山善光寺と奥沢村九品山浄真寺の住職が訪れている。いずれも浄土宗で、盛んな念仏道場である。鈴木家では、念仏修行に熱心な妻およしが近隣の村人を集めて月並念仏講を行っており、浄真寺の四月の阿弥陀経誦修行や七月の虫払い、青山善光寺の十夜法要などの念仏行事にも出掛けていることから、熱烈な信者として両寺の住職との特別な関係を築いていたものと考えられる。また鈴木家には、数日おきに三・四人の比丘尼が宿泊している。あくまでも推測だが、尼寺である青山善光寺へ念仏修行

に出掛ける比丘尼を泊めているのであろう。こうした講宿的な役割を果たしていたことも、住職との関係を深めていった背景にあるものと考えられる。

(47) こうした村落共同体内への信仰の浸透を問題とする際には、法華経や阿弥陀以外の宗派や神道の神でさえ排斥することを主張した題目講や報恩講などの存在を看過できないが、残念ながら本稿では検討しうるサンプルを見出し得なかった。

(48) Victor Turner: DRAMAS, FIELDS, AND METAPHORS.—Symbolic Action in Human Society, 1974; 梶原景昭訳『象徴と社会』、紀伊国屋書店、一九八一年、一二五～一二七頁。また、巡礼における自発性と義務についても述べている(同書、一三三～一三八頁)。